

STRUM

シュトゥルム

第 22 号 平成 26 年 1 月 15 日発行

新年明けましておめでとうございます。本年も TRAUBEN をどうぞよろしくお願いいたします。
今年こそは！忙しい伊都さんと予定が合わず、このところ見送られている親睦会を開きたいなー、と思う年の初めですが、さてどうなりますか…。今年も皆様が健康で楽しく、日々を過ごされますように！



近況報告

寒波に襲われた日本からロンドンに戻り、その暖かさ（最高気温が 10 度を超すこともあります！）と穏やかな気候に驚いています。まさかの晴天の続く陽気にイギリスの天気の良いさにうんざり、海外脱出を夢見るイギリス人たちは喜びながらも、これは冬が長引く前兆なのではないか、今年の夏は暑くならないのではないか（冬が寒くないと夏が暑くならないというのが定説です）と疑心暗鬼になってしまうのは、霧のロンドン（この言葉は実際に霧が出るわけではなく天気の悪さを物語っています）に慣れているイギリス人の悲しい性なののでしょうか、いい天気ね！と嬉しがりながら、語尾に？マークがついているのを感じます。



ロンドンに来て寂しいことのひとつに、教会の鐘の音が聞こえないということがあります。ウィーンを始め、歴史を持つカトリック教国では各エリアに必ず一つ、かつて人々の集う中心であったことを彷彿とさせる、目印のような大きく立派な教会があり、その鐘の音が響くとああ日曜日になったと感じ、また教会での演奏会も多く、ヨーロッパにいたことを実感するひとつの大きな要素の一つでしたが、冬の教会でのコンサートは拷問に近く、そのあまりの寒さに演奏終了後は手の感覚がなくなっていることもよくありました。ロンドンでは宗派の影響かそういった尖塔そびえたつ教会があまり見当たらず、コンサートも少ないので、寂しいながらも、この季節はああ、あの拷問がなくて助かるとほっとしています。



今年もまた、新たな課題に取り組みながら、終わりのない演奏者としての道を、気持ちを引き締め、そして楽しみながら歩んでいきたいと思っていますので、演奏を聴いていただくことができればと願っています。

【伊都】

第 11 回 加納伊都ヴァイオリンリサイタル

12 月 20 日、突然のあられ、雷に慌てた午後でしたが、開演の頃には雨も上がり、目にも鮮やかなイルミネーションの輝くみなとみらいで 11 回目となるコンサートが始まりました。

伊都さんによると、今回の選曲は「新しい節目の今年、気持ちも新たにクラシック、ヴァイオリンのオーソドックスな魅力を奏でることができればと願い、モーツァルト、ブラームス、そしてサン＝サーンスというクラシックコンサートの王道というべきプログラム…」とのこと。

10 年を超えヨーロッパで培われた伊都さんのクラシック音楽の感性が存分に発揮された堂々の演奏が続き、伊都さんと同じくイギリス在住のピアニスト、加賀都喜乃（かがときの）さんの豊かな表現と相まって、息を呑む迫力のコラボレーションが楽しめました。

アンコールは、超高速伊都ワールドの「チャールダッシュ」、そしてクリスマスらしい「アヴェ・マリア」でしっとりと締めました。

前半のドレスは今回のチラシ撮影と同じ、別人！？のように大人っぽくゴージャスなベージュのドレス。後半はラッキーカラー、赤のニュードレス。伊都さんの新たなスタートの決意を象徴するかのようでした。





いとちゃんの クラシック講座

op.18

イギリスには、クロムウェルの清教徒革命の影響で、バロック、ロマン派のクラシックの黄金時代に有名な音楽を輩出することができなかったことは前にこの欄で話しましたが、19世紀後半から、近現代に入り、数は少ないながらも名曲を作った作曲家が存在します。イギリス第2の国歌と言われる「威風堂々」を作ったエルガーもその一人ですが、やはり親しみやすいクラシックの名曲、日本では歌にもなり有名な「木星」(＝ジュピター)を含む7つの星にちなんだ「惑星」組曲を作曲したグスターヴ・ホルスト(1874～1934)もイギリス人の誇る作曲家です。

今年はそのホルストの生誕140周年にあたり、ホルスト関係のコンサートが続くそうですが、今いち切りの悪い140周年という区切り、あと10年待って150周年でいいのではないかと疑問をはねのけアニバーサリーは敢行されるようで、数が少ないからか、イギリス出身の作曲家、演奏家をとっても誇りに思うイギリス人の国民性(話の折々に、イギリスのこれこれこういう作曲家、演奏家を知っているかと必ず聞かれます。ウィーンではなかったことなので初めとてもビックリしました。確かにオーストリア人がモーツァルトを知っているかと聞かれないのですが・・・)が反映されているようです。

ちなみに、ホルストの「惑星」以外の作品は大変地味で、非特徴的で、退屈であるというのが一般的見解です。実は私も惑星以外、イメージの無いこの作曲家、イギリスの美しい田舎町コッツウォルズ出身で、地元の民謡から作られた曲も存在するそうなので、この機会に少し親しくなってみようかと思っています。【伊都】

今年もライブコンサート！？

昨年3月、大変好評だった渋谷のライブハウス「JZ Brat SOUND OF TOKYO」でのコンサートが今年も実現しそうです！ 時期は5月の連休あたり・・・ということ以外、今のところ未定。詳細は3月発行のStrumでお知らせしますのでお楽しみに！

DVD Classic Collection

作品 No.17

「野ばら」

天使の歌声～ウィーン少年合唱団

1957年ドイツ

ストーリー

動乱のハンガリーからオーストリアに逃れた身寄りのないトーニ少年は、昔ドナウ河の汽船の船長だったというブリュメル老人と暮らし始めた。ある日、教会でウィーン少年合唱団の歌うミサ曲の調べを聞いたトーニは、その美しい声に魅せられる。トーニに歌の才能があることを知ったブリュメル老人は、彼をウィーン少年合唱団に入れる決心をした。

見どころ

日本では「童は見たり、野中のバラ」の訳詞で知られるゲーテの詩「野ばら」。私達が知っている(この映画で使われる)ヴェルナー(ウェルナー)とシューベルトの曲が有名だが、他にも150ものメロディーがあるという。少年の美しい声にはやはりヴェルナーの曲が合う。先日の伊都さんのアンコール曲、グノー「アヴェ・マリア」も大事なシーンで美しく響く。

感想

昔の映画らしいストーリー展開を楽しめる。ウィーン少年合唱団は、宮廷の少年聖歌隊として500年もの歴史を誇り、かのハイドン、シューベルトも在籍したとか。(なのにヴェルナー?) 60年代には来日の度にアイドル的人気だったことが懐かしい。今も世界中を飛び回り、日本でも毎年のように全国ツアーが行われている。機会があれば生の歌声を是非聴きたいものだ。

*DVDはTSUTAYAの店舗でレンタル可能な作品のみをご紹介します。

昨年8月よりアドレスが変わりました

ホームページ itokanoh.com

リサیتالオフィスメール

後援会メール

info@itokanoh.com

trauben@itokanoh.com

編集後記 大晦日のカウントダウンでおなじみの「東急ジルベスターコンサート」、毎年テレビ東京で放送されます。曲の終わりと同時に新年午前0時を迎えるという趣向ですが、今回は巨匠、飯守泰次郎さん指揮のワーグナー「マイスタージンガー」でした。さすがに飯守さん！慌てることのない堂々のタクトで、曲が終わった瞬間ぴったりの午前0時、大成功で盛り上がりました。/伊都さんの演奏を見ていても、あんなに長い曲を楽譜を見ながらとは言え頭の中に全て入れ、自分の表現をしながら集中力を保って演奏し続けるのは、本当に凄いことだなぁ、といつも感心します。/今年も脳トレ励みましょ！<ゆ>

発行：加納伊都後援会 T R A U B E N

〒231-0835 横浜市中区根岸加曾台 15

TEL：045-622-6780

FAX：045-621-6423

Email：trauben@itokanoh.com

Homepage：itokanoh.com